

大南の軌跡

武蔵村山市立 小中一貫校
大南学園第七小学校
学園だより NO. 5
令和2年8月26日

自分の意志で行動する子供を育てるために

副校長 中山 和彦

34日ぶりに子供たちの元気な姿を見ることができ、とても嬉しくなりました。

今年は、「コロナに打ち勝つ夏」と、今までに経験したことのない夏休みとなりました。御家庭での様々な我慢や御苦労があったことと思いますが、登校した子供たちの笑顔を見ると、それぞれ充実した夏休みを送ることができたのだろうと感じました。

さて、今年度から新学習指導要領が完全実施となりました。その中で、児童が「主体的・対話的で深い学び」をすることが求められています。今回はこの中の「主体的」ということについて少し考えてみたいと思います。

御承知のように「主体的」とは、他人に言われて動くのではなく、自分の意志で行動することです。では、子供が自分の意志で行動できるようにするために、私たち大人が配慮すべきことは何でしょうか。

私が若いころ、教育書を読み、実践し、なるほどと納得したことがあります。それは、どのような声掛けをするかで子供の動きが大きく変わってくるということです。

例えば、自分の担任している教室が散らかっていたとします。教室が散らかっていることを子供たちに認識させた後、何と声をかけるべきでしょうか。

- 1 「ごみを拾いましょう。」
- 2 「1人ごみを5つ拾いましょう。」
- 3 「どうしたら教室がきれいになるか。自分で考えて取り組みましょう。時間は3分間です。」

1の指示を出しますと、半数ぐらいの子供はゴミ拾いをしますが、残りの子は、何もしません。

2の指示をしますと、具体的な目標が明確になるので、学級の多くの子供がごみを5個以上拾おうとします。

とは言え、1も2も教師に言われたから「受動的」にやっているにすぎません。

3の指示を出すとどうでしょう。子供の動きはがりと変わってきます。箒を出して掃き始める子、本棚の整頓を始める子、ロッカーの上の水拭きを始める子、それぞれが自分で考え、動き出すようになります。やらされている掃除から、自分からすすんで行う掃除に変わるのです。

つまり、大人が子供たちに、自分で考えるための入り口、ヒントを与えることが、子供の「主体的な行動」を促すことにつながるのだと思います。

御家庭でお子さんがなかなか机に向かわないとき、どんな声をかけるでしょうか。

「早く勉強しなさい。」「30分間は机に向かいなさい。」ではなく、「どうやったら漢字を早く覚えられるのかなあ。自分でやり方を工夫してみてくださいらん。」等の言葉ではどうでしょう。

声のかけ方を工夫することによって、「受動的」から「主体的」へと子供の姿勢を変えるきっかけを与えることができるのではないのでしょうか。

今学期も新型コロナウイルス感染症対策のため、様々な制約があると思いますが、児童の健康・安全を第一に教育活動を行なってまいります。また、その中でも、子供が主体的に学習や活動に取り組めるよう工夫してまいります。

保護者、地域の皆様には、様々な面で御協力いただくこともあると思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。